

氷屋の旗

石川啄木

青空文庫

親しい人の顔が、時として、凝^ち乎と見てゐる間^{うち}に見る見る肖^にても肖つかぬ顔——顔を組立ててゐる線と線とが離れくになつた様な、唯不釣合な醜い形に見えて来る事がある。

それと同じ様に、自分の周囲の総ての關係が、亦時として何の脈絡も無い、唯浅^{あさま}猿しく厭はしい姿に見える。——慍^かうした不愉快な感じに襲はれる毎に、私は何の理由もなき怒り

——何処へも持つて行き処の無い怒を覚える。

双^{もうはた}肌脱いだ儘仰^{あふむけ}向に寝転んでゐると、明放した二階の窓から向ひの氷屋の旗^{フラフ}と乾き

切つた瓦屋根と真白い綿を積み重ねた様な夏の雲とが見えた。旗^{フラフ}は戦^{そよ}と風もない炎天の下に死んだ様に低頭^{うみだ}れて襞^{ひだ}一つ揺がぬ。赤い縁だけが、手が触つたら焼けさうに思はれる迄燃えてゐる。

私も、手も足も投出した儘動かなくかつた。恰^{あたか}も其氷屋の旗が、何かしら為^しようくと焦^あ

心^せり乍ら、何もせずにある自分の現在の精神の姿の様にも思はれた。そして私の怒りは隣室でバタ／＼団扇を動かす家^{うち}の者の氣勢^{けはひ}にも絶間なく煽られてゐた。胸に湧出る汗は肋^{あばら}

骨^{ほね}の間を伝つてチヨロリ／＼と背の方へ落ちて行つた。

不^ふ図、優しい虫の音が耳に入つた。それは縁日物の籠に入れられて氷屋の店に鳴くので

ある。——私は昔自分の作つた歌をゆくりなく旅先で聴く様な気がした。そして、正直のところ、嬉しかった。幼馴染をさななじみの浪漫的ロマンチック——優しい虫の音は続いて聞えた——それも暫時しばし。夏ももう半ばを過ぎるのだと思ふと、汗に濡れた肌の気味の悪さ。一体何を自分は為る事があるのだらうと思ひ乍ら、私は復死んだ様な氷屋の旗フラフを見た。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆18 夏」作品社

1984（昭和59）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「石川啄木全集 第四卷」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

初出：「東京毎日新聞」

1909（明治42）年8月

入力：砂場清隆

校正：菅野朋子

2000年6月3日公開

2005年11月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

氷屋の旗

石川啄木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>